

春

燈



6 月号

敦の句

あはあはと桐咲いて何もかも遠し

句集『柿の木坂雑唱』昭和四十九年

敦には桐の花の句は二句しかない。そのうちのこの句を短冊に染筆している。〈あはあはと桐咲いて何もかも遠し〉と。この句、先生の御氣に入りの一句ではなかったか。昭和三十八年の万太郎の急逝、その後の文字通りの多事多端、何より心労。年譜にはない部分も想像に余りある。それらを思えば、この句の「何もかも遠し」の八音、筆者の胸にずしんとひびいてくる。

西山 浅彦

敦の句

夕牡丹愛に渴くといふことあり

『柿の木坂雑唱以後』昭和五十九年

昭和四十五年頃は、牡丹の句を沢山お詠みになっている。牡丹の芽を愛しみ育て、咲いては華麗な牡丹の姿に強い情愛をそそがれる。へ夕牡丹雨呼ぶ翳を深くしぬ×嘆きつつ散りし牡丹を掻き集む×歳月は経ても牡丹への想いは深く、敦先生の情炎が心奥に秘められている。また、それ故の寂しさも伝わってくる。豊麗な牡丹を見るときこの句をおもうのである。

吉澤 恵美子

西ヶ原日記 (十九)

鈴木榮子

東京大仏お胸ゆたかに陽炎へり

江戸百閻魔梅の赤塚一閻魔

シンプルイズベスト銚子の蜆汁

一群の名残りの雁を振り仰ぐ
海猫渡り来て勢揃ふ銚子港
灯台光達距離春愁に及ぼざる
天保水滸伝春の大利根蕩々たり
沖に漁り春の浜網繕へり
明日館学舎やことに花の雨
エスカリオテのユダに証シの復活祭

花のころ

綱
徳
女

同行どうぎようを誘ひて春の京へかな
み仏の千手千眼あたたかし
笛吹きて春呼びにけり迦楼羅王
金毘羅王兜目深はなしくさや花軍
み仏に弱音吐くまじ花供ふ
春火桶にかざす手織き青年僧
涅槃図や肋あらはに僧侍る
みささぎに参る佐保姫裏手より
おぼろ夜や耳にやさしき京言葉
み仏にすべてを委ね春逝かす

桜
守

太田慶子

仏間の戸おほきく開く初音かな
弥陀仏の水晶の眼や春の鴝
初蝶の口づけ未だぎごちなし
大輪といふ花種の小さきこと
ひなあられ仏の母へ買ひにゆく
月おぼろ小萩茶碗のややいびつ
小面のくすくす笑ふ花明り
恋猫と恋せぬ猫と眠りをり
笑ひこらへて涙のこぼる鳥雲に
ちちははに見せたき桜みてをりぬ

当月集

鈴木 榮子選



○ 佐渡谷 秀一

うぐひすの招く東雲明りかな
麦わらで吹きし頃はも石鹼玉
春愁やリアドロ人形影あはき
声遠きムンクの「叫び」春の闇(盗難)
大仏のやうに脚組む花の下

○ 横田 初美

潮の色日ごとに眩し松の芯
置き去りの貝は虚に春の浜
レイアウトの灯台春の灯あつめけり
漁港へと道はなだれて花菜風
春日傘鷗の粗相許しけり

○ 増田 大

古本の掘り出し物や日脚伸び
旅に読むもの買ひ揃へ西行忌
青菜飯古女房のさしすせそ
青き踏む歩調合はずは所詮無理
をぢさんと呼んで呼ばれて四月馬鹿

わたつみの声に耳貸すおぼろかな
春鯛揚らず無聊のかもめかな
紐ゆるみ蛸蚪兄弟の縁果つる
在り在りと光陰見ゆる落花かな
安曇野に水ゆきわたり仏生会

春燈の句

鈴木 榮子選



はね太鼓身内に春の怒濤かな

神奈川 河本由紀子

亀鳴いてをり馬謖はも斬られたり

醬油の香かぎろひ立てる銚子かな

彼岸西風紫褪せし数珠の房

一両電車畑中はしる日永かな

椿寺接待受くる緋毛氈

春宵の銀座弾んで暮れゆけり

絵手紙の吉鳥の飛ぶ桜かな

春夕焼雲の端のぞく忘れ汐

東京 後藤眞由美

辛夷咲く白き雲追ふ一日かな

湖暮れて風の置き去る花筏

石仏の顔和らげる雪解かな

兵庫 秋山 薦

置き薬の流行るモンゴル霾れり

裏山にころがる小石雪解風

日ごと夜ごと力増す枝三鬼の忌

雪解風山の匂ひをそこここに

鶯餅つまめば笑窪見せにけり

大阪 中上 馥子

ままごとの椀は折紙つくし摘む

丹波路のまだ水引かぬ春田かな

落剝の伐折羅の怒髪あたたかし

京都 片山 博介

土光さん惚ぶ目刺を焼きにけり

躑らるる邪鬼に春日の及びけり

植系し主亡くて満開枝垂梅

朧月軍鶏おもむろに目蓋閉づ

霾るやフロントガラスの護符揺るる

台北 呉 文宗

老足の小町出づべし春の闇

蛇穴を出て通り魔に襲はれぬ

春泥やうちうちだけの骨納

兵庫 前川千枝子

天井棧敷の顔触れ臙かな

納骨後の墓去り難し初鶯

余言

鈴木 榮子

桜餅包む経木の音も買ふ

中澤 弘

いまは桜餅を六ヶ買うとすると白い厚紙の織り畳みパッケージに入れてくれます。経木を使うところは余りないでしょうが、思い出の中で餅菓子をかうと長い経木で先ず包んでくれました。そしてその端を少しさいて紐替りにしたり、別にしなやかな紐でゆわえて呉れます。

作者はその一連の動作を見ながら菓子包が出来のを待っている訳です。何年か前の平和で優しい日本の町の風景です。

花散るや阿修羅の眉根さらに寄り

荻野嘉代子

阿修羅像はもつと大きいと想像していましたが、意外と小さく年嵩の少年の風貌でした。

奈良興福寺にあったのでしょうか、宝物殿に入つてすぐ右手に曲がったところに少年阿修羅像があります。

この少年像にどうして阿修羅という名を持たせたのか今でも分かりません。それよりもこの阿修羅像は益々有名になりわざわざ尋ねる人さえあります。

むしろ、阿修羅を知らず青年、大人になつて迎える阿修羅

の前の姿と私には思えます。
たしかに眉を寄せてこれからの苦難を思いやっている相なのででしょうか。少年の惑い、愁い、不安、決意のような形を眉根に隠すなく表していることが、この像が多くのファンを持つ由縁でしょう。

約束のごとく一面春にそまりけり

沼田 桂子

作者は上野の公募展に大きな絵を出す画家です。
春燈のカットに困ると描いて頂いて随分勝手をさせて頂きました。

この句はどこが佳いというより、まるでそれこそ約束のよ
うに表れて来て呉れました。

約束の句、こんな句詠んでね、詠みましょう、という約束
の地、約束の句です。

靖国や老いの遺族へ初ざくら

山川 好美

国のためとは言いながら靖国の遺族の深い悲しみは、いかに
ばかりであろうか、遺族は歳々老いてゆくのです。

癒ゆる日を固く信じて癌の春

小林 昭

作者の病いの作品を見てから大分になりました。いつも心
にかけて拝見しているのに、中々触れられませんでした。みんな心にかけています。行けるところまで向き合つてゆきま
しょう。